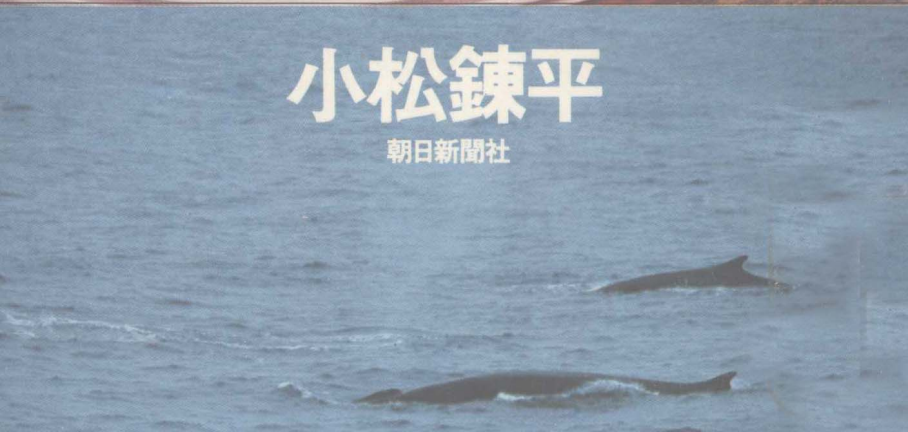


〔ル鯨の海〕



小松錬平

朝日新聞社



THE SEA OF THE WHALE

小松鍊平

朝日新聞社

小松鍊平（こまつ・れんぺい）

1929年 北海道釧路市生まれ。
1952年 東大農学部卒。
同年 朝日新聞社入社。東京本社科学部
員，社会部次長をへて，現在，同社
編集委員。
著書 『自然の素顔』（朝日新聞社）『おい
しい魚図鑑』（千趣会共著）
訳書 『ロビンソンクルーソーの妻』（文
藝春秋）

書名——ルポ・鯨の海

定価——六〇〇円

発行日——昭和48年11月30日 第1刷

著者——小松鍊平

発行者——朝日新聞社 岡見 璋

印刷所——大日本印刷株式会社

発行所——朝日新聞社
東京・名古屋
大阪・北九州

I

船団南下す

汚い捕鯨なのか

準備完了

二十二年前の第五次南鯨

出港

初顔合わせ

ぎっくり腰とベニヤ板

タバコと火事と酒

二千平方メートルのマナイタ

舌雑巾

船団の構成

職種と給与

祈りと葬い

南鯨にもぐり込む

再見

赤道祭

食べる

用意された物資

キャッチャー

てつぼうさん

プロツェンコ氏

夕暮れの色

操業打ち合わせ会

産婦人科船医

アジト

座頭市と示現流

漁場に到着

鯨は家畜である

操業開始

初漁式

II

157 155 140 138 135 125 120 117 113 109 106 100 92 85 83

解体作業	162
船団一日の行動	169
脱オリンピック方式	174
鯨と人類	181
日本捕鯨の将来	186
捕鯨技術の存続	190
新造キャッチャーに移る	192
追鯨士	202
クラヌス	211
鯨の敵と口	222
タコちゃん	232
南鯨と北鯨	236
赤肉の波	252
うまい鯨肉	256
シャチの襲撃	264

Ⅲ

さらに南へ

ケの発見

逃がす漁業

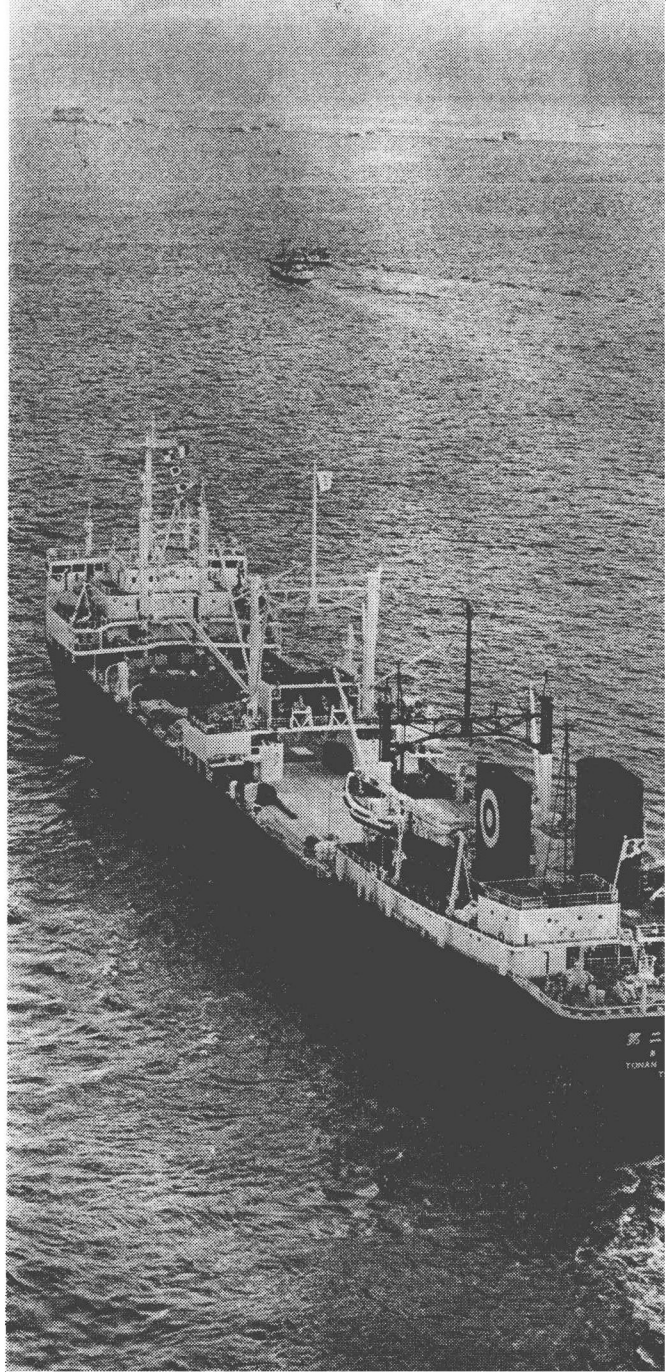
乱獲・絶滅の歴史

航海の終わり

あとがき

287 283 281 272 269

I
船団南下す



汚い捕鯨なのか

昭和四十七年初秋。

その六月、ストックホルムで開かれた国連の人間環境会議で「商業捕鯨の十年間無差別禁止勧告案」が多数決で採択された。

続いて同月末、国際捕鯨委員会の第二十四次年次会議がロンドンで開かれた。その総会はアメリカのJ・L・マッキュー教授が議長をつとめたが、総会は先のストックホルムでの決議を「科学的根拠がない」と否認した。

この総会の前に、国際捕鯨委員会科学分科会がストックホルム決議を審議した。つまり総会の前に資源学、統計学の専門家が具体的な検討をしたわけで、その議長は、これもアメリカのワシントン大学教授P・G・チャップマン博士がつとめた。科学者だけのこの分科会は全員一致でストックホルムの宣告を非科学的であると判定した。

これらの一連の動きがどうもよくわからない。地球上どこでも鯨が減っているのは知っている。捕鯨先進国のイギリス、ノルウェーなどがすでに捕鯨をやめているのも知っている。

捕鯨を直ちにすべてやめれば鯨の資源は回復するかもしれないということも知っている。しかし停

止がはたして最上の策なのか、やめることでどんなことになるのか、殊にソ連と並んで二つの大規模捕鯨国である日本にはどのように影響するのか。

ストックホルムでは、汚染、環境破壊などの視点から捕鯨が取り上げられた。資源環境の破壊を防ぐ見地から捕鯨禁止が提案され、「鯨を守れなくして、どうして地球が守れようか」という情感あふれる叫びのなかで多数決が生まれた。しかし、鯨をたん白食糧源としての見地から見る議論がなくなつてよいのか。

日本をはじめアジア、アフリカの人間は、欧米よりずっときびしい環境の中で、たん白源を確保しなければならぬ。そのことは、ストックホルム決議の中に考慮されているのか。鯨を食肉と考える人たちの多数決が、鯨を食卓にのせ続けてきた少数派を否定できるものなのか。食習慣の違いは宗教のそのように、よほどのことがない限り、お互いに容喙しないというのが国家間、民族間の共存の大前提ではないのか。

その大前提を破らねばならないほど、捕鯨はよほどの段階にきているのか。

私たちの間に疑問は数多く出された。いったい日本の捕鯨は、そんなに世界の批判を浴びるような汚い捕鯨をしているのか。日本の捕鯨の現状を反対論者は知っていて反対しているのか。

いやそれよりも、日本人自身が捕鯨の実態を知っているのか。政治家は、高級官僚は、資源学者は、水産学者は——だれか最近、南氷洋へ出かけて、じかに見てきた人はいるのか。

朝日新聞東京本社社会部次長だった私は、社会部長に一つの企画を提案した。

「ひと昔前のように、早く多くとるのが善というような捕鯨をいまもやっているとすれば、捕鯨は減るだろう。捕鯨という壮大なシステムは日本の水産業がづくりあげた傑作の一つだと思うが、それが終焉を迎えるとしたら、だれか記者を出してルポさせてはどうだろう。『最後の船団』、社会面でいけるんじゃないか。

もしそうでなければ、つまり、昔の汚い捕鯨から変身しているなら、それはそれで見ておく価値はあるだろう。公害、ベトナムばかりでも社会面はつらい。たまには、南の涯の海と鯨と男の話もいいんじゃないか」

この提案はしばらくタナ上げされた。もしオーケーが出たら、適材としてはAか、BかCかと、三人ほどの記者を私は考えていた。

私自身は学生時代に、卒業論文の資料集めと学資稼ぎをかねて一漁期、南氷洋で働いた経験があり、もし私がゆくことになれば私なりの比較ができるとは思っていた。しかし、四十三歳のいわば中古車をそんなきつい所へはゆかせまい、せいぜい若い記者の相談にのったり、その原稿の受け手をやるくらいだろうと思っていた。

同年秋。

ある日、社会部長がニヤニヤしていた。

「あれな。お前さんいつてみるか」。いくぶん覚悟はしていたものの、そのとき、戦争中の召集令状、赤紙というやつ、あれはこんなふうにある日やってきたのだらうな、と思った。

四カ月、完全に海の上に追い出される。明日も、あさっても、そこにあると思いいこんでいたもの、自分の家、そこにいる妻子、番号を回せばその向こうで確実に応答する友人、くつろぐ酒場、ゆきつけの麻雀屋、欠かさず見ていた番組、あざやかなコースの緑、本屋の新刊書コーナー……すべてから否応なく、ひき離される。しかし、待てよ。赤紙とは違う。帰る日があるし期限もある。死を覚悟する必要はない。東京の有楽町の空気を、もう十五年も吸い続けている。このへんで転地療養も悪くない。花のロンドン、パリへゆくのも記者なら捕鯨船で地の涯をさまようのも記者……。

「言い出しつぺですからね。いきますか」

それまで五年間、デスクに座って、ひとさまの原稿を切ったり葬ったりしてきた。それが一夜にして書く方に回るということも、少ししんどいことだが、これは私の心の中のことだ。

早速、準備にかかった。まず、多くの人に会おう。記者同行を受け入れてくれた日本水産の中井春雄社長からまず始めよう。

それはやや、試験をされているという感じがあった。とかく風当たりの強い捕鯨のふところに新聞記者を入れるのだから、中井さんとしても、こちらの真意、性向、力量などを知りたいのは当然だろう。

「わしはいったんだ。なに、ちつとも悪いことをしているのではない。ルールに従って正々堂々とやっていることを見られるのに、何を気にする必要があるか、とね。むしろ積極的に見ていただく。あのままを世界に知らせてもらう。そうでなくては日本の水産業はこれから国際間でやってゆけせんよ」

大日本水産会の藤田蔵会長にもお会いした。一見、平凡なおじいさんだが、なかなか頭の整理された見通しの確かな話しぶりに敬服した。

「近ごろ日本人の道義心がどうも信用できなくなりましたね。交通法規、交通道德ひとつ、きちんと守れない人が多いでしょう。外国と交渉していて、日本はこれこれの規制を実施していると書類で説明しますと、向こうは、それはいい、問題はその規制をきちんと守っているか、どうかである、と突っ込んできますね。そういうときに、ちゃんと守っていると突っ張る心より所、私の心の中の自信、そういうものがどうもね。日本人の道義心の回復が、私たちの世界でも最も急を要する問題だと思いますね」

鯨類研究所の大村秀雄所長は、日本におけるミスター鯨と呼ぶべき存在である。

「実験材料の鯨の背骨を捕鯨船団に頼んだことがありますね。日本から送られてきた骨を見たら、真っ白なんです。たいてい、捕鯨母船の甲板で処理したのをそのまま送ってくるから肉やなんかいっぱいいついてるものなのです。あまり白いので、わざわざ実験材料用の骨はきれいに洗ったりし

てきたのか、と会社の人に聞いたら、その人は、いえ、いつもこうです、近ごろは爪の先ほどの肉もとらないと商売になりませんと笑ってました。私も驚きました。こんなに真剣に肉を利用する、資源をムダにしない。捕鯨もすっかり考え方を変えているのですね」

東大海洋研の西脇昌治所長は、鯨類の分類、生態では世界的な研究者であり、同時に学者の世界では珍しい熱血漢でもある。

「環境会議では、会場外のデモが、さかんに日本は野蛮だ、乱暴だというんだが、彼らの議論の方が私にいわせると、よほど野蛮だ。日本の主張の方がずっと冷静で、根拠のあるものなのだと思う。君もしっかり見てきてくれ給え。見てもしいけない点があったら、遠慮なく批判してほしい。しかし、もし間違った見方をして報道したら、私に叱られると思って下さい」

カメラマンが同行することになった。写真部長が「どんなタイプがいいか」と聞いてくれる。

「体が丈夫。酒のみ、酒にのまれないやつ。賭けごとにおぼれないやつ。人間関係をうまくやるやつ」

よし任せろ、ということで金井三喜雄君、二十九歳にきまつた。

四カ月の暮らしの支度もある。男というものはチリ紙を一週間何枚使うのか、歯ブラシは一本で何日もつか、改めて考えたってわかるわけがない。日本水産捕鯨部に問い合わせ、標準を聞いて、そ

の三割増しぐらいの線で雜貨、嗜好品をそろえる。

洗濯ばさみ、ライターの芯、眼鏡のスペア、時計の予備、玉露に煎茶に焙じ茶……。なくしたり壊したりしたら入手不可能、あれもこれもと限りなく広がって段ボール箱七つ、トランク三つの山ができたときは、もう出かける氣力をほぼ使い尽くしたかと思うほどくたびれた。

十一月二十三日、東京駅から正午の新幹線ひかり号に乗った。家族も同僚もだれもない。

ひとり、日帰りビジネスにでもゆくような風情だな、ま、こんなものだ、旅立ちというものはなどと思ひながら神戸に向かった。船出は二日後の二十五日である。

準備完了

二十三日夜、神戸国際ホテルに入った。

神戸駅経由、神戸港第五突堤に横付け中の母船第二函南丸あて、東京から発送してあつた荷物は無事に着いていた。さて、ホテルで何もすることがない。しばらく留守にすることを二、三の人に手紙で知らせ、見落としている映画でもあれば見ておこうと新聞の案内欄を調べたが、これというものもない。買い忘れているものは……洗濯用の洗い桶、懐炉とベンジン、鉢植、ミカン……これは、明日妻がきてから買ってもらえばいい。

そうだ、あれが見つかるともしれない、店がしまらないうちに探せるだけ探してみるか、とホテル

を出た。

あれとは二冊の本である。一冊は昭和十七年に出版された『鯨 その科学と捕鯨の実際』（大村秀雄、松浦義雄、宮崎一老共著）、学生時代にもすでに手に入らなかったし、今度も東京で神田、早稲田の古本屋街はもちろん、古本屋と見れば必ず探してみたが空しかった。もう一冊は昭和四十年に出た『捕鯨砲、日本人の記録』（宮良高夫著）、私の知る限りでは、こと鯨に関して最近のものであり、豊富で正確な資料を、やわらかいリズムのある文章で綴ったすぐれた本だが、これももう市場では手に入らない。版元に問い合わせると絶版で手もとには一冊もないという。

東京になくても、ここ神戸は、何しろ捕鯨船団の母港だ。あつてもおかしくないじゃないか。なけりゃ、お休み前の散歩だと思えばもともとだ、と考えて、三ノ宮のあのはなやかな商店街を、東の端から歩き出した。

すぐれた感覚で飾られたショーウィンドーがつらなるこの商店街には、買物客本位の「買うてくださるお客」を大事にする関西独特のたたずまいがあつて、東京とはどこか違う。面白いことに、商店街の一区画に一、二軒の割で古本屋がある。洋菓子店の陳列棚に、手焼きのせんべいをひょいとはさんだような風情だ。

こりゃあ、あるかもしれない、というカンが湧いてくる。一丁目、二丁目……四丁目に入つて右手の小さな古本屋に入った。あつた。「あつた」と心の中で叫んで、手をのばす前にひとしきり眺めた。あつた、それもピンク色の紙ひもで、私が求めていた二冊と、もう一冊『世界貿易産業叢書――